

インカルチュレーションと遠藤周作の文学

—神学と文学の相互作用—

李 英 和

1. はじめに

遠藤は幼少期にカトリックの洗礼を受けたものの、青年期に入ってからこのキリスト教という洋服が自分の背丈に合わず、生涯に渡ってその克服の方法を模索し続けてきた。周知のように、その模索とは西欧キリスト教という洋服を自分に合う和服にすることであった。いわば、西欧キリスト教を日本の風土にあうキリスト教にしようと求めてきたのであった。このような遠藤の試みが、いかにして日本の宗教風土の中でキリスト教が根を下ろし、日本人に受け入れられるかという問いであるとしたら、この問いはインカルチュレーションという神学用語に置き換えることができよう。

「インカルチュレーション」(inculturation)とは、「文化内受肉」「文化内開花」と訳されるが、その意味内容は、端的に言えば、西欧型のキリスト教や文化を一方的にそのまま「土着化」させるのではなく、西欧型のキリスト教や文化とそれぞれの地域の文化との対話を積極的に肯定し、その対話の「プロセス」における「変容」をまた容認していこうとするものである¹。以下に一節を引用する。

アジアにおいて文化的受肉はアジアの人々によってなされなければならない。いかなる外人の宣教師、西洋の神学者、または西洋の教会指導者もアジアのキリスト者たちの自己表現がどうあるべきかということを告げることはできない。外人宣教師や欧米の神学者ができることは、キリストをアジアの人々に紹介することである。この意味でアジアにおけるキリスト教の文化的受肉はアジアの人々によるキリストの発見、及びキリストに包まれた自分自身の発見である²。

上記の引用は、外人宣教師や欧米の神学者らはキリストを紹介することはできるけれど、文化的受肉は現地の人々によってなされるべき、という意味である。このような考えは、遠藤の言葉からもうかがうことができる。

遠藤にとって神は、「新宿や渋谷のようなもつともありふれた日本的風景のなかに見つける」³ことができなければならない。さらに彼は、「日本人の心にあうキリスト教を考えたい」⁴と思っている。遠藤はまさに信仰者と文学者という融合しにくい立場の間で苦悩、葛藤し続けながら、日本文化の中でのキリスト教の文化内受肉を求めて、自らのキリスト教文学を通して、従来「普遍的」と考えられてきた西欧中心のキリスト教を問い直そうと試みた一人であるといえよう。

本稿では、このような遠藤の評価を認めたうえで、遠藤がキリスト教のインカルチュレーションを自分の創作活動を通して、どういうふう実践していったかについて考察する。さらに、文学と神学の相互作用とその可能性について見てみたい。

2. カトリック教会とインカルチュレーション

カトリック教会は、20世紀近くにもわたって、一貫して西欧型の教会であり続け、キリスト教に根づいた西欧文化が他の諸文化より優位にあるという意識を厳然と保持していた。このような意識を保っていたカトリック教会が、西欧中心の西欧型のキリスト教から、世界に開かれた教会へと移行してゆくきっかけとなったのは、第2バチカン公会議⁵（1962～1965年）であった。いわば、第2バチカン公会議は、「インカルチュレーション」の神学が発展してゆく決定的な出発点となった⁶。しかし、他の宗教や文化を尊重するという「インカルチュレーション」の精神が浸透するようになったのは、1970年代に入ってからであり、教会における「インカルチュレーション」神学がさらに発展をみるようになったのは、1975年、教皇パウロ6世が、『現代世界における福音宣教』を公にしてからである⁷。

一方、アジア地域の諸教会において、「インカルチュレーション」という言葉が用いられたのは、1970年のアジア司牧会議の文書においてであった。しかし、そのプロセスについて明確に表現されたのは、1979年の国際宣教会議であった⁸。その後、アジア司教協議会連盟は、1984年から、1991年までの間、対話の神学のためのワークショップを主催し、その最初のワークショップの文書において「インカルチュレーション」のプロセスを対話の実践と結び付けていた。その後、再び「インカルチュレーション」が改めて注目を浴びるようになったのは、1998年に開催されたアジア特別シノドス⁹においてであった。このアジア特別シノドスの席上において、日本司教の発言に、遠藤の名前が取り上げられているのは注目に値する¹⁰。この事実は、遠藤が教会に先駆けて「インカルチュレーション」の方向性を自らの文学を通していかに具現していったかを物語っている。

3. 遠藤作品にみられるインカルチュレーションの試み

3. 1 『アデンまで』

遠藤は青年期に入ってから自らの信仰について悩み続け、「日本人の感覚には基督教を受け入れない何か」¹¹があることに気づく。遠藤は、実際に西欧に赴き、そこで西欧世界のキリスト教に内在する「普遍」という概念との衝突を体験している。遠藤文学の第一作である「アデンまで」（『三田文学』1954年、11月）は、その時の体験を窺わせる自伝的色彩の濃い作品である¹²。特に、第一作であるだけに、遠藤の作家としての出発点において、本稿のテーマにつながる「インカルチュレーション」の創作実践のきっかけは何であったかを垣間見ることができる。

「アデンまで」は、一人の白人女性と「俺」との恋愛が一つのモチーフになっているが、そこにまさに身体レベルの差異と同一性、個別と普遍の価値観が潜められている¹³ことに注意すべきであろう。「俺」は帰途の船上で、3年前にヨーロッパに渡った当時のことを回想しているが、「俺」はその当時、「人種はみな同じだ」と思っていた。それゆえ、「俺」は自分がヨーロッパの歴史と文化の中に素直に溶け込めると信じ切っていたに違いない。

そのうち女が俺に惚れ、俺がその愛を拒まなかったのもこの、人種はみな同じだという幻影があったからである。(中略) 彼女に俺は思わず、こう叫んだのだった。「いいのか、本当に俺でいいのか」人種がみな同じであるならば、なぜ、その時、俺はこのようなみじめな呻きを洩らしたのだろう。(12 頁)

上記の引用は、「俺」の自分の肌の色に対する屈折した自虐意識を表わす箇所である。では、ヨーロッパ人の「俺」に対する眼差しはどうであったか。彼女の幼馴染みである友人の家を訪ねることになった「俺」は、そこで彼女の婚約者として紹介される。

「こちらは」とデデは博物館の案内人のように唇をまげ、うすら嗤いをうかべて言った。「その婚約者の……」と彼は俺の方にふりむいた。(中略) 一同の視線にはあきらかに特別なものがあった。彼等たちが沈黙のうちにとりかわす私語や囁きが俺にははっきり読みとれた。(黄色人が白人と婚約したんだって) (そんなことってないわ) それら無言の声、無言の非難が目くばせのように、あちらの女から、こちらの男に飛びかわされた。(16 頁)

上の引用から考えられるのは、ヨーロッパ世界に住む白人にとって、黄色人種が〈外部〉からやって来て、その世界を第三者として眺めることは認めても、その世界の〈内部〉に入り込もうとして、白人女性と関係を結ぶこと、つまり同一化することは認めないということであろう。そこには、厳然とした差異／差別があった。「俺」はその時、そう認識したのであった。

先述したように「アデンまで」は、白人女性と「俺」との恋愛というモチーフを用いて、あたかも肌の色といった解決しがたい問題を取り扱っているように見える。しかし、むしろそれとは別個にヨーロッパ世界が眼差しを向ける〈日本〉の特殊／差別が問題とされていると考える。遠藤自ら、ヨーロッパとの距離を総括的に表わした文章がある。

このヨーロッパは日本人の感覚ではついていけない何かがある。善の深さも悪の深さも、その高貴な精神もその美しい芸術も。私はわずかな歳月ではあったが巨大なその壁にぶつかり、自分とこの国々との距離感だけを強く意識するようになった。そしてその挙句「病気になった」。¹⁴

遠藤のいう、ヨーロッパの「善の深さ」「高貴な精神」と、「俺」に対する白人の「慈悲、慈善」とは、キリスト教の〈普遍〉としての価値観を思わせる言葉であるが、青年遠藤は、それらの言葉に「無意識の偽善に対する怒りの感情」をひそかに覚えたことが推測できよう。「アデンまで」の「俺」も、白人たちの視線に〈選民意識〉的なものがあるのを感じたはずである。少なくとも、「俺」は、そう感知したと理解してもよいだろう。「俺」にとって白人女性との恋愛は「愛だけでは充分ではなかった」。それゆえ「俺」は、白人女性との恋愛も続けられなくなって、ヨーロッパを離れることになった。

このように「俺」は、自分の回想を通して、なぜ自分がヨーロッパを離れるようになったか、その理由を我々に聞かせてくれるのである。では、ヨーロッパを離れる現時点、すなわち船上での「俺」の心境はどうだろうか。

歴史もない、時間もない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂の中を一匹の駱駝が地平線にむかって歩いている風景が、それはなぜか知らぬが、俺にはたまらない郷愁を起こさせる。俺にはその理由は分らないけれども、この郷愁は黄い肌をもった男の郷愁なのである。(23 頁)

「俺」は、「スエズ運河」を通った時、茶褐色の砂漠の風景を眼にして、「たまらない郷愁」を抱く。ところが、3 年前、ヨーロッパに渡った時も、同じ風景を眼にしたはずである。しかし、その時の心境は語られていない。「俺」は、今ふたたびアデンの港町に近づくにつれて、「砂漠」と「駱駝」の風景に「たまらない郷愁」を感じるのである。「この郷愁は黄い肌をもった男の郷愁」であるという。なぜ「俺」は郷愁を感じるのだろうか。「俺」と「砂漠」と「駱駝」の同一性として挙げられるのは「黄色」という色である。「俺」は、今まで自分の肌が黄色いということに、自虐意識ない劣等感をもっていった。しかし、「砂漠」と「駱駝」の風景を見つめる「俺」の視線に、もはや色の対立は読み取れない。いわば、「俺」にとって「黄色」という色は、ポジティブにみつめかえせるものになったと解釈してもよいだろう。

このような後半部の「俺」の心境の変化は、非ヨーロッパ的世界を生きて行かざるを得ない「俺」の新たな認識によるものであると考える。遠藤文学の出発期におけるヨーロッパ世界の体験は、遠藤文学の問題性へと直結していくと思うが、筆者は、そこで「アデンまで」を遠藤文学におけるインカルチュレーションの萌芽期に位置づけたいと思うわけである。

3. 2『沈黙』

『沈黙』は、遠藤が歴史小説という枠組みを通して、現実に日本文化の中でキリスト教をどう受け入れたらいいのか、についての思索を深めたものであるといえよう。『沈黙』でロドリゴが日本へ向かって旅立つ経緯は、「まえがき」に詳細に説明されている。フェレイラ棄教の報告がローマ教会にもたらされた、という叙述からはじまる「まえがき」には、注目すべき箇所がいくつかある。

フェレイラの棄教の真相を究明するために最初に集まったのは、ローマ教会の 4 人の神父であった。しかし作品では、その後この 4 人の神父たちについては何も語られていない。代わりにこの 4 人の神父とはまったく別個に、ロドリゴをはじめとするポルトガルのイエズス会の 3 人の神父が、まったく同じ理由から日本への潜入を決意し、日本へ向かうことになる。日本への潜入を決意する同じ理由とは、「日本で、統率者を失い、次第に挫けだしている信徒たちを見棄てること」ができないからであり、フェレイラの棄教を「たんなる一個人の挫折ではなく、西欧全体の信仰と思想の屈辱的な敗北」であるとみていたからであった。この 3 人の神父の気持は、当時「ポルトガル聖職者の共通した感情」であったとされている。小説はローマの神父の動向を語ることで、西欧の共通した感情へと拡大しよう

としていることが推測できよう。いわば、『沈黙』の「まえがき」には、すでにその当時、西欧の共通した感情として彼等の堂堂たる信仰の優越感を垣間見ることができるといことである。

ところで、なぜ『沈黙』の「まえがき」に注目するのか。西欧世界から疎外された遠藤が抱く普遍／個別の問題がそこに潜んでいるからである。西欧世界に潜在する普遍性への疑念が、作者遠藤に萌していたとすれば、『沈黙』の世界構造は、まさに〈普遍／個別〉の関係の反転の世界ということになる。「まえがき」には、フェレイラの棄教をめぐるいろいろな動向とは別に、日本におけるキリスト教弾圧とその迫害の歴史が簡略に記されている。「まえがき」で、淡々と紹介されている日本の禁教の歴史は、西欧世界のキリスト教が主張してやまない普遍性が、一小国日本から排除され疎外されたことを事実として語るものである。この排除と疎外という事態は、西欧的な普遍性の限界を示すもののなか、それとも日本の特殊性を示すもののなかを問いかける。

さて、ロドリゴは日本潜入に成功する。しかし、当時は、幕府によって鎖国され、キリスト教禁制が公布された時代であるがゆえに、ロドリゴはキリスト教信者が次々に処刑されて行くという苛酷な実状を目撃することになる。日本に潜入して間もない頃、ロドリゴは自分も捕われの身となって、「神の沈黙」に絶えず懷疑を覚えていた。牢屋に囚われているロドリゴは、処刑されたガルベと信徒のことを思い、「神の非在」へとつらなる懷疑を深める。このような「神の沈黙」への問いかけは、宗教としてのキリスト教の根本への疑いのようにみえるけれども、遠藤の問題意識からすればそうではない。それはロドリゴの内なる西欧世界のキリスト教の普遍性への懷疑へと集約されていくのである。ある日、牢屋に囚われていたロドリゴは、奉行所の役人たちの取調べを受ける。

通辞：「パードレの宗旨、そのものの正邪をあげつろうておるのではない。エスパニヤの国、ポルトガルの国、その他諸々の国には、パードレの宗旨はたしかに正とすべきであろうが、我々が切支丹を禁制にしたのは重々勘考の結果、その教えが今の日本国には無益と思うたからである」（264 頁）

ロドリゴ：「正というものは、我々の考えでは、普遍なのです」（中略）「もし正が普遍でないという気持があれば、どうしてこの苦しみに多くの宣教師たちが耐えられたでしょう。正はいかなる国、いかなる時代にも通ずるものだから正と申します。ポルトガルで正しい教えはまた、日本国にも正しいのでなければ正とは申せません」（264 頁）

役人のいう論理は、西欧世界におけるキリスト教の「教え」がたとえ〈正〉ではあっても、それがそのまま日本の精神風土においては〈正〉として受け入れられないというものである。それに対してロドリゴの論理は、〈正〉とは〈普遍〉と結びつかねば〈正〉とはいえない、西欧世界のキリスト教が〈正〉であれば、「いかなる国、いかなる時代」にも〈正〉であるはずであるという。この西欧世界のキリスト教に内在する〈普遍〉が、若き日の遠藤周作を苦しめたと考えられる。「アデンまで」の「俺」は、懸命に西欧世界の〈普遍〉に自分を満たそうとしていた。ところが、ある日、「俺」は〈普遍〉のほう为非西欧世界に属する〈特殊・個別〉を排除したことを直観したのであった。しかし、『沈黙』におい

ては、西欧世界の主唱する〈普遍〉とは、とりもなおさず〈正〉だと信ずるロドリゴの信念は変わらない。

「この国は沼地だ。やがてお前にもわかるだろうな。この国は考えていたよりもっと怖ろしい沼地だった。どんな苗もその沼地に植えられれば、根が腐りはじめる。葉が黄ばみ枯れていく。我々はこの沼地に基督教という苗を植えてしまった」(295 頁)

「切支丹が亡びたのはな、お前が考えるような禁制のせいでも、迫害のせいでもない。この国にはな、どうしても基督教を受けつけぬ何かがあったのだ。」(298 頁)

上記の引用は、ロドリゴを棄教させるために語られるフェレイラの言葉であるが、フェレイラの発言に注意したい。フェレイラの話では、日本の精神風土は、キリスト教の定着する土地ではなかったということである。ロドリゴに棄教をすすめるために語られるフェレイラの「日本沼地論」は、遠藤が日本におけるキリスト教の受容の難しさと、そして精神的風土など、とりわけ日本人の底辺（基層部）のうちに秘められた信仰の真実を、外部に知らせようとしてフェレイラに語らせた言葉であろう。すなわち、フェレイラが自分の体験から帰結した「日本沼地論」は、西欧的知を代弁するロドリゴの信念との葛藤のすえ、キリスト教の正統的観念にみえる「父性の神」との対決を戦略化したものである。

さて、ロドリゴは、自分が棄教を拒否したために、かえって日本人信徒たちが拷問を受け処刑されて行くことを知り、自分が踏絵を踏まざるを得ないところに追いつめられる。ロドリゴは、日本の役人から自分が棄教しないと穴吊りの拷問を受ける日本人信徒たちを救うことが出来ないといわれて、棄教の選択を迫られていた。やがてロドリゴは踏絵を踏むことになる。

司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた時、それは形だけのことでなかった。(中略) この足の痛み。その時、踏むがいいと銅版のあの人は司祭にむかって言った。踏むがいい。お前の足の痛さをこの私が一番よく知っている。踏むがいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生れ、お前たちの痛さを分つため十字架を背負ったのだ。こうして司祭が踏み絵に足をかけた時、朝が来た。鶏が遠くで鳴いた。(312 頁)

あらためて問うならば、日本人信徒を救うためとはいえ、ロドリゴに踏絵を踏ませる作者の真の意図はどこにあったのか。『沈黙』の最後のところに語られている、ロドリゴの心情をみるがよい。

私がお前の愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。私はこの国でもう最後の切支丹司祭なのだ。そしてあの人は沈黙していたのではなかった。たとえあの人は沈黙していたとしても、私の今日までの人生があの人について語っていた。(325 頁)

確かにこの言葉には、今まで、西欧世界のキリスト教の普遍性を支える〈知〉を超克したロドリゴ

の確信に満ちた様子が読み取れる。ロドリゴに踏絵を踏ませた遠藤の思いを本稿の主題と結びつけて考えてみると、まさにそこに「インカルチュレーション」によせた遠藤の戦略があったと考える。つまり、遠藤は、物語外部時間で、ロドリゴに踏絵を踏ませることによって、「インカルチュレーション」に向けた一つの方向性をみせたといえよう。

3. 3 『深い河』

晩年の遠藤は、歴史小説から再び同時代の日本人を題材にする小説に立ち向かうようになる。『深い河』においては、単に日本でキリスト教をどう受け入れるべきかという、ごく限られた領域にとどまらず、キリスト教が西欧以外の国々の文化に適合するプロセスを、世界全体に向かって広げていこうとする。遠藤のキリスト教文学の出発期にあたる第一作の「アデンまで」で芽生えたインカルチュレーションへの思いが、最終的に、遺作の『深い河』の中でどう位置付けられていくのかを検討する。

『深い河』の大津は、神父になって印度に行っている。小説の中には、彼がなぜ印度に滞在しているのかについてはまったく触れていない。彼はなぜ日本に帰国せず、印度に行っているのだろうか。印度へ来るまでの大津の足跡をたどることによってその理由を解明してみよう。

大津は神父の道を志してフランスのリヨンにある修道院に入って、何年も教義を教わっていた。しかし、ヨーロッパのキリスト教に違和感を感じて葛藤しており、しかも彼の考えは、教会で異端的とされて先生方に叱られる。それゆえか、彼は、神父になるのに不適格だとされ叙階が延期される。そして、南仏の修練院に移され、そこで肉体労働をする。しかし、彼はまたもや叙階されない。さらに、大津はその後、イスラエルのガリラヤ修道院で勉強を続けることになる。ここまでが、大津が美津子に宛てた手紙を通して知らされる、印度に行く前までの大津の状況である。その後、美津子は偶然同窓会の集まりで、大津が神父になって印度にいつているという話を聞いて、印度へ旅立つわけである。

さて、ここで、もうひとつ、大津はなぜ修道院を転々としたのだろうかという疑問が起る。上述したように大津は、リヨンの修道院から南仏の修練院に移され、後にリヨンの修道院とは全く関係のないガリラヤ修道院で勉強を続けたことがわかる。ところで、リヨンの修道院で何があったのだろうか。

「ぼくはヨーロッパの基督教を信じているんじゃない」（217 頁）

「三年間、ここに住んで、ぼくはこの国の考え方に疲れました。彼等が手でこね、彼等の心に合うように作った考え方が……東洋人のぼくには重いんです。溶けこめないんです。それで……毎日、困っています。」（218 頁）

上記の引用は、大学時代以来、はじめて美津子と再会した大津が、リヨンの修道院で感じたことを美津子に告げる言葉である。しかも彼は、日本に戻ったら「日本人の心にあうキリスト教を考えたい」¹⁵と自分の思いを美津子に漏らすのであった。それ以来、大津に関する情報は途絶えていたが、四年後、美津子が大津宛に出した手紙に大津から返事が来た。その手紙によると、彼はすでに南仏の修練

院に移されていたことがわかる。修道院で校長先生と大津が交わした言葉を見てみよう。

大津：「神は色々な顔を持っておられる。ヨーロッパの教会やチャペルだけでなく、ユダヤ教徒にも仏教の信徒のなかにもヒンズー教の信者にも神はおられると思います」（264 頁）

校長先生：「君はなぜ仏教徒に戻らない。そのほうが君の考えに自然な復帰ではないのか」

大津：「いいえ、私が育ったのは……日本でも仏教徒の家ではなく、先生たちと同じように基督教の家庭でした。だからぼくが神の多くの顔の中でも先生たちと同じものを選ぶのがぼくには自然だったのです」（265 頁）

上記の対話からすると、校長先生と大津の考えは相容れないばかりか、他の国の文化の中で育てられた大津の考えは、やがて異端視される。一方、校長先生の発言からみると、キリスト教をその国の文化に受肉させようとする姿勢などがまったくみえない。それゆえ、彼は修練院に移されたと思われるが、それでも大津の考えは変わることがないため、リヨンにある修道院では破門されたと考えるのが妥当であろう。その後、大津からイスラエルのガリラヤ修道院で勉強を続けているという内容の葉書が美津子宛に届く。この事実から考えてみると、彼が叙階されたのはリヨンの修道院ではなく、ガリラヤ修道院だろうと推測するしかない。それ以来、二人の便りはまたもや途絶えていたため、大津がいつ、どこで叙階を受け、なぜ印度に行っているのかなどについては、何の説明もない。

さて、大津に会いに印度へ来た美津子は、彼がヒンズー教のアーシュラムで生活しており、ヒンズー教徒の服装をして、死んだ人を背負って火葬場まで運ぶ仕事をしているという情報を得る。どうやら大津は、自分が属していた印度の修道会から追い出されたと思われる。やっと大津と邂逅することができた美津子は、「あなたはヒンズー教のパラモンじゃないのに……」と彼に話かける。大津に話しかけた美津子のその後の言葉は省略されているが、あなたはカトリックの神父でありながら、なぜヒンズー教徒の服装をして、彼等のために働いているのか、という問いであろう。美津子の問いに対して大津は、「玉ねぎがこの町に寄られたら、彼こそ行き倒れを背中に背負って火葬場に行かれたと思うんです」¹⁶と答える。大津は、自分が信じる神、それを「玉ねぎ」と呼んでいた。大津の思惟をもっと理解するために、彼が、毎晩、愛読しているというガンジーの語録集の一箇所を見てみよう。

「さまざまな宗教があるが、それらはみな同一の地点に集り通ずる様々な道である。同じ目的地に到達する限り、我々がそれぞれ異なった道をたどろうとかまわないではないか」（323 頁）

大津がガンジーの思想にどれほど共感を覚えたか推測できる一節である。大津にとって、玉ねぎの真似をするのに、ヒンズー教徒であれ、カトリックの神父であれ、そんな違いは重大ではなかった。このような生き方をしていた大津は、後に日本人の観光客の一人の三條の代わりに大怪我をして死に至る。

さて、本節の意図は、大津がなぜ印度に行っているのかを解明して、本稿の課題につなげていこうというものであった。勿論、大津がガンジーの思想に共感していることと、彼の思惟から考えてみると、彼は、真のキリストの福音を実践するために印度に行っている、という推測は可能である。なぜなら、そもそも、キリスト教の福音は、この世の底辺や辺境の地で苦しんでいる貧しい人々にこそ注がれるものであるからである。しかし、『深い河』の最後のところに、「マザー・テレサ」の名前が出ていることに注意を払いたい。美津子を始めとする印度ツアーの一行は、道端で死にかけている老婆を助ける『死を待つ人の家』の修道女たちを見かける。周知のように、マザー・テレサは、ヒンズー教徒のみならず、宗教の違いを越えて多くの人々から慕われていた。この『死を待つ人の家』は、マザー・テレサが創立した「神の愛の宣教者会」が作った臨終の家である。『深い河』創作日記によると、大津がマザー・テレサの影響を受けたという箇所があり¹⁷、遠藤周作がマザー・テレサの献身的な生き方に敬意と関心を寄せていた¹⁸ことがわかる。そうだとしたら、大津にマザー・テレサの生き方が投影されていることは否定できない。

ガンジーとマザー・テレサは、「無私」の生き方を通して、宗教と文化のちがいを越えて、愛と平和のメッセージを我々に伝えようとしていた。大津の生き方もこの二人と似ている。この事実から考えると、大津が日本へ帰らないで印度に来たのは、ガンジーとマザー・テレサの生き方に引き寄せられたからであると考えられる。ガンジーとマザー・テレサ、この両者の根幹にあるものは、愛そのものであった。さらに、両者において、キリスト教であれ、ヒンズー教であれ、仏教であれ、もはや宗教の違いは問題ではなかった。むしろ、二人の生き方は、我々人間がどう生きていくべきか、という問いに答えているかのように思われる。

したがって、遠藤は、この二人の生き方に引き寄せられて、彼らが住んでいた印度という非西欧世界の一端に触れることによって、文化のうちに受肉するというインカルチュレーションのプロセスを、もっと広く発信しようとしたといえよう。

4. おわりに

以上、いくつかの作品を取り上げて、遠藤がいかに教会に先駆けて「インカルチュレーション」の方向性を自らの文学を通して具現していったかを見てみた。遠藤の場合は、「インカルチュレーション」という語は用いなかったが、その語の意味するものの必要性を見抜き、1954年の小説「アデンまで」においてすでにその萌芽を見せ始めた。その後、1966年発表された『沈黙』において、キリスト教の宣教や受容の方法としての「インカルチュレーション」を強く示唆していた。さらに、1993年刊行された『深い河』においては、キリスト教が西欧以外の国々の文化に適合するプロセスを示唆し、そこからキリスト教会のあるべき姿を再構築しようとした。さらに、キリスト教の宣教や受容の方法としての「インカルチュレーション」を強く示唆していた遠藤文学は、作品の中にみられる神学的主題を媒介にして、文学と神学の相互作用を可能にしたといえよう。

* 論文中の遠藤周作の小説からの引用は『遠藤周作文学全集』（全15巻、新潮社、1999—2000年）に拠った。

【註】

- ¹ カトリック教会とインカルチュレーション神学に関する論文は、越前喜六「福音と文化—日本におけるインカルチュレーションをめぐる」『ソフィア』134号（上智大学、1985年）、小幡義信「神学への問いとしての文化的受肉について」『カトリック研究』第45号（上智大学神学会、1984年）ハンス・ベルンハルト・マイヤー「典礼のインカルチュレーションの問題」『カトリック研究』第57号（上智大学神学会、1990年）、古橋昌尚「インカルチュレーション、キリスト教の生き方」『人間学紀要』32号（上智大学、2002年）などが詳しい。
- ² G・フローレス「典礼のアジア的展開のために」『カトリック研究』第46号、上智大学神学会、1984年、12月、158頁。
- ³ 遠藤周作「私の場合—自分の文学」（1967年）『遠藤周作文学全集』第12巻、新潮社、2000年、381頁。
- ⁴ 遠藤周作「深い河」（1993年）『遠藤周作文学全集 4』新潮社、1999年、219頁。
- ⁵ 第2バチカン公会議は、教皇ヨハネ23世（1958—1963年在位）によって全世界に呼びかけられ、彼の後継者教皇パウロ6世（1963—1978年在位）に引き継がれた。
- ⁶ 古橋昌尚「インカルチュレーション、キリスト教の生き方」『人間学紀要』32号、上智大学、2002年、12月、196頁。
- ⁷ 古橋昌尚「インカルチュレーションと多文化主義—福音と文化との互恵的対話にむけて—」清泉女学院大学人間学部研究紀要2号、2005年、3月、29頁。
- ⁸ スティーヴン・ベヴァンズ「アジアにおけるインカルチュレーションの歩み—アジア司教協議会連盟の25年間（1970—95）—」『神学ダイジェスト』85巻、上智大学神学部神学ダイジェスト研究会、1998年、12月、48—54頁。
- ⁹ 「アジア特別シノドス」とは、ローマ・カトリック教会がアジアのカトリック司教の意見を聞く会議で、1998年4月から5月にかけてローマで初めて開かれた。
- ¹⁰ 日本司教は、イエス自身はアジア人だったにもかかわらず、その教えは欧州を経由して世界に広まったために、父性的な面ばかりが強調されたと指摘し、これと対照させる形で、遠藤周作をはじめ幾人かの見解と思想を紹介し、東西文化のちがいを論じたと記事は伝えている（「アジアシノドス」『朝日新聞』1998年6月23日）。
- ¹¹ 遠藤周作「私の場合—自分の文学」（1967年）『遠藤周作文学全集』第12巻、新潮社、2000年、306頁。
- ¹² 「自伝的」というのは、作者遠藤自身も、1950年6月からフランスに留学した経験があり、それと重なるからである。しかし、遠藤は、1953年2月、健康を害したため、3年間にわたるフランス留学から帰国せざるを得なかった。「俺」が関係する作品世界、すなわち、フランス留学に挫折して日本に帰る留学生という人物設定や、物語時間などがそのまま遠藤自身の経験と符合するところが多くある。
- ¹³ 李英和「遠藤周作の文学とキリスト教—インカルチュレーションと預言者生」筑波大学博士論文、2007年、23頁。
- ¹⁴ 遠藤周作『遠藤周作による遠藤周作』青銅社、1980年、85頁。
- ¹⁵ 注4に同じ
- ¹⁶ 遠藤周作、前掲書、317頁。
- ¹⁷ 遠藤周作『『深い河』の創作日記』『遠藤周作文学全集』第15巻、2000年、新潮社、311頁。
- ¹⁸ 山根道公「遠藤周作『深い河』とマザー・テレサ」『キリスト教文化研究年報』第23巻、ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所、2001年、3月、111頁。

Inculturation and Endo Shusaku's literature

—Interaction between Theology and culture—

Lee Younghwa

Abstract

Endo Shusaku had been pursuing to find ways how to accept Western Christianity modified and harmonized with Japanese people and take root all through his works. In terms of the theological view, inculturation can be substituted for his pursuit. Inculturation is a relatively new theological terminology. It is not unilateral indigenization of western style Christianity, but acception of various cultures from a variety of regions as well as from the West with activeness and positiveness. And it is also positive attitude to accept transformation as a result of communication process. Endo implies what inculturation means through his essays and novels. As a Catholic and a novelist at the same time, he tried to see a new understanding of western-oriented Christianity which had been considered to be universal at that time through his catholic literatures by means of anguish and conflicts inside him. In this paper, while acknowledging the appreciation of Endo, the ways how Endo expressed inculturation through his creative activities are to be investigated. In addition, the interaction between literature and theology and it's possibilities are to be considered.

